

『今昔物語集』 試論

— 武の系譜と智の系譜 —

はじめに

『今昔物語集』（以下、『今昔』）の編纂されたと考えられている時代（院政期頃）は、中古から中世へのゆるやかな歩みの中にあつた。そのことは『今昔』の説話の中にも、感じられる。例えば、巻二十五・十二話「源頼信朝臣男頼義、射殺馬盗人語」には、頼信・頼義親子の馬盗人への対応が、驚きをもって活写されている。

河内の前司源頼は、東より名馬を得させて来るのであるが、その子供頼義も「実ニ吉馬ナラバ我レ乞取テム」と思つて、親のもとに「兩極ク降ケレドモ」ものともせず、出かけていく。頼信は、頼義が何もいわない先に、その来訪の目的を察知し、今日はもう暗いのでわかるまいが、明朝馬を見て気に入れば取れ、と言う。

その夜東より後を追つてきた馬盗人が、馬を盗み出し

安 東 大 隆

て逃げてしまう。厩の方から聞こえてくる声を聞いた頼信は、子供に告げもしないで、身仕度をして馬に乗り、関山の方面へ追いかけていく。一方、頼義も親と同じように思つて、身仕度をして独りで追いかける。祖ハ「我が子必追テ来ラム」ト思いケリ、子ハ「我が祖ハ必追テ前御ヌラン」と思つて、遅れまいと馬を走らせていくうちに、関山のほとりにやつてきた。盗んだ馬に乗つた盗人は、「今ハ逃得ヌ」とそばの川の中をゆつくり馬を進めていく。その様子を見た頼信は、

事シモ其々ニ本ヨリ契タラム様ニ、暗ケレバ頼義ガ有无モ不知ニ、頼信、「射ヨ、彼レヤ」ト云ケル言モ未ダ不畢ニ、弓ノ音スナリ。

その直後、無人の馬の走つていく鐘の音が、カラカラと響いている。頼信は、

盗人ハ既ニ射落テケリ。速ニ末ニ走ラセ会テ馬ヲ取テ
来ヨ

と言って、その首尾も見届けずにさっさと帰ってもとのように寝てしまふ。翌朝、何もその事については触れなかつたが、馬の背にすばらしい鞍がおかれていた。

この説話は、当時まさに台頭してきた武士のある日の出来事を、描写したものである。ここには異質な倫理や価値観のもとに行動する武士の様相が、驚きをもって語られている。特に、不意の事件に対して、全く打ち合わせも連絡もしていないのに、親子が力を会わせて行動して解決していく。それはまた、当然のように対処されている。何よりとまどう事なく、全体の動きが、無駄なく整然とした中に進行していく、これは大変な驚きであつたであろう。

翌朝、頼信出デ、頼義ヲ呼テ、希有ノ馬ヲ不被取ル、
吉ク射タリツル物カナ ト云事懸テモ云ヒ不出シテ

馬を引き出した。一言も昨夜の出来事について言及しなかつた。と感想を述べていることからしてもこのことが、編者にとっては理解出来ないことであろう。

帷キ者共ノ心バヘ也カシ。兵ノ心バヘハ此ゾ有ケルト
ナム語リ伝ヘタルトヤ。という結びからも窺える。

さて、小論ではもう少し詳細に、『今昔』の中にある中古的なものと中世的なものとの関わりを考えてみたい。

1

以前、拙稿（「征箭ノ身」で「霊」を退治した話）

〈別府大学国語国文学39号〉で、論じたものを更に敷衍して論をすすめていこう思う。

物怪を退治する場合に、加持・祈祷などをしたり、陰陽師によつたりするのが、普通であつた。ところが、仏教的な仕方では効果がなくて、「武力」によつて物怪を退治した例が、『今昔』の中にある。そこで、物怪の退治の仕方というところに焦点をおいて、更に考えてみよう。

『今昔』の中で「物」を扱つた説話は、卷二十七（本朝付霊鬼）に多い。次のような説話が、「物」を退治するという内容を含んでいる。

十一卷

六話 玄昉僧正、互唐伝法相語

話 推古天皇、造本元興寺語

二十卷

三話 天狗、現仏坐木末語

十二話 伊吹山三修禪師、得天宮迎語

十三話 愛宕護山聖人、被謀野猪語

二十四卷

二十話 人妻成惡靈除其害陰陽師語

二十七卷

二話 川原院融左大臣靈宇陀院見給語

三話 桃園柱穴指出兒手招人語

四話 冷泉院東洞院僧都殿靈語

七話 在原業平中将女、被食鬼語

十話 仁寿殿台代御油取物来語

十八話 鬼、現板来人家殺人語

廿三話 播磨国鬼、来人家被射語

廿九話 雅通中将家在同形乳母二人語

卅一話 三善清行宰相、家渡語

卅三話 西京人、見庇天門上光物語

卅四話 被呼姓名射野猪語

卅五話 有光来死人傍野猪、被殺語

卅六話 於播磨国印南野殺野猪語

2

再度確認しておくが、従来「物」を退治したり、調伏したりする場合は、加持・祈祷をしたり、陰陽師に依頼したりするのが、一般的であった。

しかし、次の説話を見ると、その見方を少し変える必要があることに気づく。

卷二十 「伊吹山三修禪師、得天宮迎語第十二」

伊吹山で修行している三修禪師は、

心ニ智リ无シテ法文ヲ不学ズ、只弥陀ノ念仏ヲ唱ヨリ

外ノ事不知。名ハ三修禪師トゾ云ケリ。他念无ク念仏

ヲ唱テ、多ノ年ヲ経ケリ。

そうしているうちに、空から、「明日ノ未時ニ、汝ヲ

可迎シ」という声が聞こえてきた。その日を弟子達に告

げ沐浴し香を焼き、一緒に念仏をして、西に向かっている

ると、西の山の峰の松の木の間から、光と共に仏が姿を現わした。さまざまの菩薩がすばらしい音楽を奏し、空より花が降り、紫雲が庵の上に厚く棚引き、観音が、紫金台を、聖人の前に持ってきたので、その蓮台に乗り、西をさして去っていった。差詰め、絵に描いたような見事な来迎往生の相である。ところが、その七・八日の後、薪をとりに山に入った下僧が、梶の木の上に裸で縛り付けられている聖人を見つける。解き下ろされそうになつた聖人は、

仏ノ、「今迎ニ来ラム。暫ク此テ有レ」ト宣ツルニ、

何ノ故ニ解テ下ゾ

と言ひ、また、

阿弥陀仏、我ヲ殺ス人有ヤ、ヲウク

と声を挙げて叫んだが、解て木より下ろして、坊に連れて帰つた。聖人は呆然自失して、「狂心ノミ有テ」二、三日して死んでしまつた。

心ヲ発テ貴キ聖人也ト云ヘドモ、智慧尤ケレバ、此ゾ

天宮ニ被謀ケル。

と結論を述べ、更に、

如此ノ魔縁ト三宝ノ境界トハ更ニ不似ザリケル事ヲ、智リ尤キガ故ニ不知ズシテ被謀ル也トナム語り伝ヘタルトヤ。

この三修聖人の説話で重きをおかれているのは、「智慧」ということである。只多年、念仏をし続けたとしても、それだけでは十分ではない。

心ニ智リ无シテ法文ヲ不学ズ

智慧尤ケレバ

智リ尤キガ故ニ

と、繰り返し説明されている。そこには信心や修行の内容が重視されていく様子を、垣間見ることが出来るのである。三修の伝は、『本朝高僧伝』（巻七）などに散見する。『本朝高僧伝』には、賢心已講の言葉として、

三修闍梨は勤めて苦練すと雖も、智観足らず。言語の際、名譽を誇るに似たり、必ず魔焼を受けん。

とあり、その言葉通りに、

十八年（貞観）の春、天衆音楽を奏し来って日く「慈氏の命に依つて、兜卒、師を迎ふ」と。来するに玉輿を以ってし空を凌いで去る。已に七日を経て、樵夫告

げて曰く「北山の松頂に僧ありて縛らせる」と、**「今昔」**と同趣旨の内容を伝えている。

「今昔」(20巻13)「愛宕護山聖人、被謀野猪語」になると、更にはっきりとしている。

愛宕護の山に籠もつて久しく修行している持経者は、年来、法花經を持奉テ他ノ念尤シテ坊ノ外ニ出事尤ケリ、智慧尤シテ法文ヲ不学ケリ

その山の西側に獵師が住んでおり、常に持経者を供養していた。ある日持経者が喜んで

「近來、夜々、普賢ノ現ムジ給フ。然レバ、今夜ヒ留テ礼ミ奉リ給へ」と言う。

九月廿日余ノ事ナレバ夜モ長シ、夜中ハ過ヤシヌラムト思フ程ニ、東ノ峯ノ方ヨリ、白キ色ノ菩薩、白象ニ乗テ、漸下リ御マス。其有様、実ニ哀レニ貴シ。

その様子を見た獵師は、聖人にこの菩薩の来迎の姿が見えるのは、法花經を長年受持しているのだから、当然であるが、經も知らない自分にも見えるのは、変である、試してみよう。「信ヲ発サムガ為ナレバ、更ニ罪可得事ニモ非」と思つて、鋭雁矢を弓につがえて、菩薩に向か

て放した。胸に当たったと思うと光が消え、谷の方に逃げていく大きな音がした。その後菩薩の立っていたあたりに行つてみると、谷底に野猪が胸の矢を受けて倒れていた。

然レバ、聖人也ト云ドモ、智慧尤キ者ハ、此ク被謀ル也。役ト罪ヲ造ル獵師也ト云ヘドモ、思慮有レバ、此ク野猪ヲモ居射頭ハス也ケリ。

仏教に接していない獵師と持経者とを取り上げて、「智慧尤シテ法文ヲ不学ケリ」の思慮のなさを指摘している。

さて、同じように往生を扱つた説話も、「往生極樂記」を典拠とする「信濃国如法寺僧業連、往生語」(15巻20)などとは、趣を異にする。

そこには、言われる儘に修行をし、又經典を誦誦していた受容の仕方から、自己の吟味を通して、主体的に仏教に関わつていこうとする姿勢が窺える。平安貴族の世界が徐々に傾きはじめ、武士の世へと移つていく趨勢、又、永承七年(一〇五二)に末法に入ったといわれている。なお当時、強訴が相次ぎ、内裏の焼亡、法成寺焼失

等があり、騒然とした世情であった。末法も現実味を帯びたことであろう。

3

前述したような新しい思想の胎動を、念頭におきながら論を進めていこう。巻二十七は「霊鬼」を扱った巻である。

「播磨国鬼、来人家被射語」(第廿三)

を例にして論じよう。そのあらずじは以下のようなものである。播磨の国のある郡に住んでいる人がなくなつた後、「拈ナド為サセントテ」陰陽師を呼んだところがその陰陽師が、「今某日、此ノ家ニ鬼来ラントス。努々可慎給シ」と言われる。その鬼は「門ヨリ人ノ躰ニテ可来シ」という言葉にしたがって、「門ニ物忌ノ札ヲ立テ、桃ノ木ヲ切塞ギテ」鬼を防ぐ手立てを講じたのである。門を強く閉じて物の隙間から覗いていると、「藍摺ノ水干袴着タル男ノ笠頸ニ懸タル」が門の外に立っていた。「彼ゾ鬼」というので身構えていると、何時の間にか家の内に入り込み、竈の前にいた。家の内の者達は氣も動

転してしまい手をこまねいていると、その家の若い男が、いずれにしても食べられてしまうのだからと、同じ死ぬのなら、後世に名前を残そうと思って、雁箭を弓につがえて強く引いて射ると鬼の「最中」にあたった。「鬼ハ被射ケルママニ、立走テ出ツト思フ程ニ、搔消ツ様ニ失」てしまい、箭は跳ね返ってしまった。

家ノ者、皆此レヲ見テ、「奇異キ態シツル主カナト」云ケレバ、男、「同ジ死ニヲ、後二人ノ聞カム事モ有リト思テ、試ツルナリ」ト云ケレバ、陰陽師モ奇異ノ気色シテナム有ケル。其ノ後、其家ニ別ノ事无カリケリ。

然レバ、陰陽師ノ構ヘタル事ニヤ有ラムト可思キニ、門ヨリ入ケム有様ヨリ始メテ、箭ノ踊返テ不立ザリケム事ヲ思フニ、只物ニハ非ザリケリト思ユル也。

鬼ノ現ハニ此ク人ト現ジテ見ユル事ハ難有ク怖シキ事也カシトナム語り伝ヘタルトヤ。

という文でおわっている。

この説話を一読してみると、若い男の無謀とも思えるような澆刺とした行動が、目を引く。それに対して、家

他の人々や陰陽師の様子は、新鮮さに欠けている。

當時一般には、異界のものを退治したり、退散させたりする場合には、陰陽師の力に頼ったり、加持・祈禱によるのが普通であった。それだけにこの若者の行動の生新さが目に付く。「家ノ者、皆此レヲ見テ、「奇異キ態シツル主カナト」という驚嘆ともとれる表現の中に、若者の行動に対するとまどいがある。家の人の判断の基準を超えているのである。

更に、その若者は「同ジ死ニヲ、後二人ノ聞カム事モ有リト思テ、試ツル也」と、死後に名前の残ることを念頭においての行為である旨を述べる。それを見た家人は「奇異キ態シツル」と思い、陰陽師も「奇異ノ気色」を示すしかなかったのである。両者ともに同じ「奇異」という言葉でその状況が説明されているのも、考えを共有していることを述べているにほかならない。更に、「其ノ後、其家ニ別ノ事无カリケリ」と従来の常識が否定されてしまう。いままでは、その後で祟りがあったりするというものであったのであろう。その為にわざわざこの文が付加されている。

このように今までの対処の仕方が否定されていくうちに、鬼の来るといふ話そのものが陰陽師の「構ヘタル事」と疑ってしまう。そこには若い男の鬼にたいする処置がいかにか常識に反していたかが、如実に語られている。しかし、

門ヨリ入りケム有様

箭ノ踊返テ不立ザリケム事

などからして、「口ハ物ニハ非ザリケリ」と「思ユル」のである。その錯綜とした考えに立って、結びが、

鬼ノ現ハニ此ク人ト現ジテ見ユル事ハ難有ク怖シキ事也カシトナム語り伝ヘタルトヤ

となり、鬼の出現の仕方に見点を置いた形になっている。それはとりも直さず、この説話の中心になっている若い男の鬼に対する姿勢を、どのように理解し、評言を加えたらいいか、はっきりした考えがまとまっていけないのであろう。

以上のように考えを進めていくと、この説話に対する編集者のとまどいがはっきりと感じられる。それは、「予想外の行動をする若い男がいたこと」への驚きと、

換言することができよう。

更に、言葉をついで述べる、時代が移り変わっていく時に、新しい考えを持った者、(特に若者がそうである場合が多いが) 違った行動をする者、異なる価値観を持った者が現れてくる。しかし、世の多くの人々は、理解が出来ずに、困惑したりとまどったりする。そのような変革する時代の縮図を、この説話から読み取ることが出来るであろう。力をもって対処するところに、台頭する次代の権力である武士の面影を、看取することも可能であろう。この結論は前述した拙稿と同種の結論である。

4

「物」を退治する説話は、巻二七に圧倒的に多い。そこでその各説話の内容を検討しておく。

◇二話 川原院融左大臣霊宇陀院見給語

河原院を融の死後、子孫が宇陀院に奏つたのを、融が知らずに、束帯姿の霊となって現れた。そこでその間の事情を、

者ノ霊也云ヘドモ事ノ理ヲモ不知ズ、何デ此ハ云ゾ

と説明すると、「搔消ツ様ニ失」てしまつて、以後現れることはなかった。

◇三話 桃園柱穴指出児手招人語

寝殿の柱の節穴から、子供の手が出て手招きをする。経を結び付けたり、仏を懸けたりしたが効果がない。征箭を穴に深く打ち入れると、現れることがなくなつた。

◇四話 冷泉院東洞院僧都殿霊語

僧都殿の寝殿の前より戌亥の榎の方へ飛ぶ赤い単衣を射落とした源是輔は、その夜寝たまま死んでしまつた。

◇七話 在原業平中将女、被食鬼語

業平が女を連れ出して、北山科の荒れた家に籠もつたところ、雷電霹靂した。業平は太刀を抜いて準備していたが、何事もなく雷は去ってしまった。振り返つて見ると女は襲われて着物しか残っていなかった。

◇十話 仁寿殿台代御油取物来語

仁寿殿の台代の灯油を南殿の方に夜ごとに持ち去る「物」がいた。源公忠は南殿の戸の許にいて、「物」と

思われる辺りを強く蹴った。すると、油をこぼしながら南殿の方へ逃げていった。

此ノ弁ハ兵ノ家ナンドニハ非ネドモ心賢ク思量有テ、物恐不為ヌ人ニテナム有リケル

◇十八話 鬼、現板来人家殺人語

板に姿を変えた鬼が、東の対の棟の上から現れてきた。「若キ侍ノ兵立タル二人」は、太刀を抜いて「近く来バ切ラム」とかまえていると、そこを避けて、寝ている五位を庄殺してしまった。

◇廿三話 播磨国鬼、来人家被射語

鬼が来る陰陽師が言うので、「桃ノ木ヲ切塞ギ」などしたが効果がなく、若い男が弓を射掛けると、きえてしまった。

◇廿九話 雅通中将家在同形乳母二人語

乳母が二人いて、子供の取り合いをしていた。それを見た源雅道が、刀を「ヒラメカシテ走り懸」と、一人の乳母は消えてしまった。

◇卅一話 三善清行宰相、家渡語

三善清行が五条堀川の廢屋を買い取って、单身その

家にすんでいると、様々な形に変化して「物」があらわれた。あわてずに手順を経て手にいれた旨を説明し、大学の南の門の東の脇の空き地に引越させた。

然レバ、心賢ク智有ル人ノ為ニハ、鬼ナレドモ悪事モ否不発ス事也ケリ。思量尤ク愚ナル人ノ、鬼ノ為ニモ被ル也トナム語り伝ヘタルトヤ。

◇卅三話 西京人、見応天門上光物語

母の重病になったので、住まいの西の京から夜中に、弟の僧を迎えに行った侍が、応天門の上で青く光る笑う物に出会い、豊樂院の北の野で丸い光る物に出会う。矢を射掛けるといなくなった。

◇卅四話 被呼姓名射頭野猪語

兄が灯をしていると、唖れた声でその名前を呼ぶ者がいた。京から下って来た弟に話し、弟がにかけて行っても、同じように兄の名前を呼ぶ。

実ノ鬼神ナラバ、己ガ名コソ可呼キニ、其御名ヲコソ尚呼ビ候ヒツレ

と言つて、翌日弓で射た。正体は野猪であつた。

◇卅五話 有光来死人傍野猪、被殺語

亡くなった親を棺に入れて、葬送の日まで置いておいたら、夜その場所で光ることがあった。

死人ノ物ネドニ成テ光ルニヤ有ラム、亦死人ノ所ニ物ノ来ルニヤ

と、弟が夜、棺の蓋をとってその上に寝て待っている、天井から光るものが下りてきた。脇腹のあたりには刀指して、兄をよんだ。野猪であった。

◇廿六話 於播磨国印南野殺野猪語

飛脚として上京途次、播磨の印南野で山の庵に宿った男がいた。夜中にその庵のすぐ近くで葬送が行なわれた。そして、墓の中から裸の男が、火の粉をはらいながら出てきて、こちらへやってくる。庵を出て太刀で切りつけた。翌日見ると、野猪であった。

ここでは、卷二十七の説話の内容を概観したが、「物」に対してどのような対処の仕方をしているかが焦点になる。

第二話・第三十一話は、「物」に対して、道理を述べた説得したものである。

第二話

☆者ノ靈也ト云ヘドモ事ノ理ヲモ不知ズ、何デ下此

ハ云ゾ

第三十一話

☆実ノ鬼神ト云フ者ハ道理ヲ知テ不曲ネバコソ怖シ

ケレ

☆心賢ク智有ル人ノ為ニハ、鬼ナレドモ悪事モ否不

発又事也ケリ。思量尤ク愚ナル人ノ鬼ノ為ニモ被

ル也トナム語り伝ヘタルトヤ

改めて引用したが、この個所からも「物」を退散させるに、「理」をもってしようという意識を感じとることが出来る。(但し、この場合は、相手に「物」となるべき理由があり、その原因について説明したり、説き聞かせたりしている。その結果、原因が解消されるのである。)つまり、「道理・知恵」をもって「物」に対していくということである。

卷二十七の他の説話は、概ね「物」に対して「武力」をもって対していると言えよう。

「武力」の内容を見ると、太刀と弓が半ばし、一話は

足で蹴るといふものである。(最も当時の武器と言へば、太刀と弓が中心であったことを思うと当然ではあるが)従来の方法ではなく、「物」を説得したり、「武力」に頼ったりしている。

『武力』によるということの背景には、武士に対する考えがある。次の表現に『今昔』編者の、武士に対する意識を見ることが出来る。

仁寿殿の御灯油を夜毎に盗む「物」を蹴った源公忠の話(二十七・十話)に、

此ノ弁ハ兵ノ家ナムドニハ非ネドモ、心賢ク思量有テ、物恐不為ヌ人ニテナム有ケル。

公忠の勇敢さを説明する言葉として、「兵ノ家ナムドニハ非ネドモ」が付加されている。つまり、武士の家といふものは、原則として「心賢ク思量有テ、物恐不為ヌ」ものである。(因に同種の表現は、巻19・7、23・15にもある)

武士の家に対する評価には、新興勢力とも言える武士に対して、一目おいている姿勢が窺える。『平家物語』(殿上の蘭討ち)にある武士の理解と共通するものであ

る。

このような考えの延長線上には、当然武力によって、「物」を退散させるという方法があるものと思う。

おわりに

自然の出来事に対して、人の力がどう関わる事が出来るか。現代でも時としてその強大さに慄然とすることがある。古代においては尚更為すすべもなく、立ち尽くすのみであろう。人知を超えた超自然な「物」に関わる時無力の思いがつのるものである。

しかし、何らかの方法で接触し、関わりたいと思うのも又、人の常である。陰陽師の力をかりたり、加持、祈祷等によるのが、その主たるものであった。それは、平安時代の物語や日記等の所々に散見される。

調ぜられた「物」は、

この僧都に負けたてまつりぬ。今はまかりなむ。

〔源氏物語〕手習

という具合にして去っていくのである。そして又何かのきっかけがあると、突然出現して崇ったりするのである。

もちろん、全く関わりがないかというところではなく、「物」は出現する原因の確認できるものもある。その場合は、その原因を探って、解決するのである。そこには「憑坐」という憑依の仲介を必要とする。

そのようないわば、「物」に対する従来の対処の仕方を念頭において、『今昔』のものをみると、すこし趣が違ふ。武力をもとにした人の力が感じられる。長く続いた貴族社会の閉塞感の中で中世の胎動を感じるこの時代、武力も又従来と違った積極的な意味を付与されているのである。その延長線上に「物」を武力によって退治しようという試みがある。その時の主人公は、若者であったり、武士であったりする。これも時代の変化に敏感に反応し関わっていくを常にしている人々である。中世に移行していく姿の一端を、「物」に対する扱いを通して垣間見ることができるよう思う。

(本学教授)